

年初に想うこと

あけましておめでとうございます。

本年が、皆様にとって良い年となりますよう、心から祈念申し上げます。

さて、昨年もコロナ禍に明け暮れた1年でした。

毎日、テレビや新聞で、新規感染者数の発表、変異株の発生状況等の内外のトピック、それに対する有識者のコメント、等が日常化しました。

そんな日常について流されがちな毎日ですが、新型コロナウイルスの世界的流行が長期化する中で、私達は、いくつか大切なことに気づいたように思います。

今回のパンデミックを、「のどもと過ぎれば」に終わらせることのないよう、気づきの点を日々の生活に活かしていきたいものです。

私の気づきの1つ目は、「グローバル化」の真の意味について、理解を深めたことです。

今まで「経済のグローバル化」などと、分かったように用い、無条件に良いことと思っていた「グローバル化」の意味を、改めて考え直す機会となりました。人やモノが国境を越えて移動する時代に、ウイルス感染だけが隔絶されるなんてことがあるはずがありません。

「グローバル化」の動きは押しとどめられないからこそ、この機会に、グローバル化がもたらす危険性、弱点の面も含めて、さらに理解を深めたいと思います。

気づきの2つ目は、数値やデータ等の客観的な基準に基づいて行動することの重要性についてです。

私達は、普段、科学的知見に基づいて賢明に



行動していると思っ
ても、実際には、感情や個人的な考えを優先し、今起きている事実から目をそらし、行動しがちであることを、改めて認識しました。

コロナの感染初期の段階で、「春になって暖かくなれば感染は下火になる」といった半ば希望的・楽観的な観

測を唱える学者もいて、また国民の中には、それを信じたいと思う気持ちもありました。しかし今や多くの人は、たとえそれが厳しい予測だとしても、数値とデータで説明して欲しいと考えています。また、リーダーには、科学的知見や裏付けに基づく説得力ある判断を求めているのではないのでしょうか。

気づきの3つ目は、人間が、独りでは生きていけない生き物であることを痛感したことです。

私たちは、ソーシャルディスタンスの確保、自宅待機、外出自粛等々、社会的・物理的距離の確保を習慣化させられる中で、それに強い違和感を募らせてきました。それは、本能的に不自然なことであると感じたのだと思います。「人間は社会的動物である」なんて難しいことを言うまでもなく、人間は誰かとつながっていることに幸せを感じ、それが健康につながることを、改めて理解したのではないのでしょうか。

他にも気づいたことはたくさんあります。

気づきを見つける毎にいったん立ち止まり、足元を見つめ直す。歩みはゆっくりでも、確かな前進をする一年にしたいと願っています。

独立行政法人
農林漁業信用基金 理事長 今井 敏